

マックス・ヴェーバーとハイデルベルク大学

——人事案件・教育活動・同僚たち—— (1)

野 崎 敏 郎

〔抄 録〕

1896年に、ハイデルベルク大学哲学部は、新任の国民経済学教授候補の選考にさいして、学部再編を念頭に置いて、気鋭の社会政策学者を招き、国民経済学部門の刷新を図ろうとした。そして、そうした刷新を素人の議論として拒否しようとしたクニースを排除し、バーデン政府にたいして、クナップもビューヒャーも辞退した場合にはヴェーバーを任命するようつよく働きかけた。政府は、学部の意向を尊重する姿勢をとり、社会政策上きわめて急進的な見解をしめしていたヴェーバーをあえて任命する決断を下した。

キーワード ヴェーバー、ウェーバー、クニース、ハイデルベルク大学、大学問題

I 序

ある大学教授の行路を考えるときには、その研究業績とともに、その教育活動も重要な題材になる。また、修学遍歴から一人前の研究者・教師として自立するまでの過程や、同じ大学の同僚との関係、あるいは大学運営への関与にもその人の特徴が表れているものである。そして、そうした人と大学との関係が集中的に凝縮したかたちで顕現する場が人事である。その人自身がその大学にどのようにして招かれたのか、その人が直接間接にどのような人事に関与したのか、つまりその人が自分の大学に誰を招こうとしたのか、あるいは誰を招くことを拒否しようとしたのか、またその人の後任はどうなったのか——こうした事項は、マックス・ヴェーバーの事績について考察するときにも、すくなくとも副次的な意義をもつことであろう。とりわけ、彼の生涯において、彼とハイデルベルク大学との関係は大きな意味をもっている。彼がこの大学に実質的に勤務していた期間は短いけれども、退職以後も、彼はこの大学やバーデン政府との関係を保っている。そこで、彼とハイデルベルク大学との関係をみるうえで重要だと思われるいくつかの人事案件を取りあげ、そこからヴェーバー像の洗い直しをこころみたい。

本稿で主としてあつかうのは、**1896**年のマックス・ヴェーバー招聘人事（今回）、**1900**年のカール・ラートゲン招聘人事、**1903**年のエーベルハルト・ゴートハイン招聘人事、**1907**年のアルフレート・ヴェーバー招聘人事である。他の人事にも言及する。これとともに、ヴェーバーの教育活動のあまり知られていない側面や、当時のドイツの大学が抱えていた諸問題や、アルトホフ体制にも論及する。第二帝政期ドイツの大学人事が政府主導のもとにすすめられるものである以上、それは否応なしに、その時代の政治・経済・科学技術・国際関係・社会思潮等と密接に係わり、それを反映するから、こうした問題群にも言及する。

彼とその周辺の人々との行動には、研究者のあいだでも意外なほど知られていない部分があり、また誤解も散見される。そこで、未公刊史料や組織の内部資料を援用し、各時期における彼の行動と、それに対応する政府・大学の動向と、周辺の人々の動向とを照合し、彼に係わるさまざまな事実関係を究明し、整序する。こうして彼の思考と行動とを研究するための基礎資料を提供することに本稿全体のスタンスを置いている。したがって本稿は一種の調査報告の性格をも有している。

II 1896年のマックス・ヴェーバー招聘人事をめぐって

II-1 ヴェーバーと大学招聘人事

まず、ヴェーバーの周知の発言をみよう。「任命人事論議を回想したがる大学教官はいません。というのは、そうした回想はほとんどの場合不愉快だからです」（MWGI/17: 78）。ドイツにおける大学人事は偶然に支配されており、「私の一身上では、いくつかの偶然のおかげで、以前、非常に若い頃に、ある部門の正教授に任命されたのですが、その当時、その部門には、私と同年配の人々が明らかに私よりも適任だったのです」（ebd.: 75）。ここで引き合いに出されているのは**1894**年のフライブルク大学への招聘の件⁽¹⁾であるが（ebd., Anm. 8）、それだけでなく、ハイデルベルク大学に招聘されたときにも、ある問題が生じていた。それは、ゲオルク・イエリネクの没後まもない**1911**年**3月21**日に、イエリネクの娘ドーラの結婚にさいしてヴェーバーがおこなったスピーチのなかにしめされている⁽²⁾。

いまから**14**年前にハイデルベルクに招聘されたとき、私はいくらか複雑な諸事情をくぐりぬけてきて、私が体験したこと、また当地で生じていたさまざまなことから、さらに困難な事情のなかに入りこみ、また事態の状況から、まったく私がいまここでお話ししている人との関係においてとくに、そうした困難な事情のなかに入りこむと思っておりました。そうなるかわりに、私が今日ここに立っているのは、その当時私にとって非常に円熟した年長の人との友情と友情に満ちた信頼と——それは私に差しだされることが稀であったものです——にたいする感謝の責任の力のおかげであります。私自身が他人に精神的に何かを

提供する能力がなかった困難な時期に変わることなく持続した友情の力のおかげなのです。

1896 年に、国民経済学正教授カール・クニース (1821-98) の退職にともない、ハイデルベルク大学は新任教授候補の選考をすすめて、11 月 2 日付で推薦書をバーデン政府に送る。これを受けて、政府は、フライブルク大学正教授のヴェーバーを翌 1897 年 1 月 6 日付で任命し、彼は 4 月 1 日に着任する。このときに彼がくぐりぬけなくてはならなかった「いくらか複雑な諸事情」とはどのような事情か、「私が体験したこと」「当地で生じていたさまざまなこと」とは何か、彼はなぜ「さらに困難な事情」を予想していたのか、そうした困難がなぜ「いまここで話ししている人」つまりイエリネクとのあいだに生じるにちがいないと彼は思ったのか——これらの疑問にたいして手がかりが与えられていないので、読む者は隔靴搔痒の感をもたざるをえない。もちろん、ここは結婚式の席上なのだから、こうしたことを彼がくわしく語るはずもないのだが、われわれ後世の研究者は、やはりその事情を知りたいものである。そして本稿は、今回、彼がほかに済ました「複雑な諸事情」「体験したこと」「さまざまなこと」「さらに困難な事情」を究明して白日の下に晒すという無粋な意図をもっている。

II-2 若きヴェーバーとクニース

クニースはヴェーバーの学生時代の教師のひとりであるが、ヴェーバーは、クニースのひどくそっけない国民経済学講義に最初は堪えられず、むしろ国民経済学の基礎概念をロッシャーやクニースの教則本から習得するほうを好んだという (Weber, Marianne 1926/50: 75)。このことは 1882 年 5 月 2 日付の書簡からも確認できる (Weber, Max 1936: 41)。しかし、翌年 2 月 23 日付書簡において、ヴェーバーは、クニースの国民経済学および財政学の講義を聴講しなくてはならないとしており (ebd.: 71)、実際、次の夏学期が始まると、一年前とは本質的にまったく別の印象をクニースから受け、熱心に聴講している (1883 年 5 月 5 日付書簡)。それは、彼自身が、その一年間、アダム・スミスをはじめとする国民経済学にかんする学修を深めた結果である (ebd.: 74)。その年の秋から彼はシュトラースブルクで兵役に就き、その後ベルリンに移るので、クニースに接したのは一年半 (3 学期) である。このクニース体験は、かなり後になって『ロッシャーとクニース』の執筆時に役立つことになるが、本稿の主眼から外れるのでここでは深入りしない。

II-3 クニースの休職願と退職

クニースの退職事情をみておこう。彼は、1896 年夏学期 (4 月 15 日開講) が始まる直前に、政府にたいして次のような申請をしている。彼は当時 75 歳である。本文中の下線は圈点で表す (以下同様)。

資料① カール・クニースのバーデン政府宛休職願（1896年4月7日付）（GLA 235/3140）

大公国法務・文部省御中

言葉では表現できないほど真に忠実なる者がお願い申し上げます。この者は目前の夏学期期間におきまして公務の遂行からの解任を望んでおります。

前学期の最終盤に急な発病に襲われまして、それゆえ講義を通常よりも何日か早く終講せざるをえなかったのですが、おそらくその体験との関係がなくはないと存じます。

私は、医者¹の助言に従ってお願い申し上げているのですが、医者²の助言は、同時に、私にとってなおふさわしいと思われます長期の業務遂行可能性の見通しを許容しております。このお願いをご承認いただきますならば、また以下の件をご告示賜りますならば、きたる夏学期をかりうじてもちこたえるものであると存じます。員外教授レーザーは、実践的国民経済学および財政学にかんする講義をすでに二つとも担当しておりますし、この者はかならずやすすんで学部の博士審査を代行することでありましょう。博士キンダーマンは、その二つの小さな国民経済学の授業の代わりに、一般的国民経済学説（理論的国民経済学）にかんする私の講義をすすんで担当することでありましょう。

夏学期の開講日が目前に迫っておりますゆえ、私の真に忠実なる申請にたいして、すみやかにご厚情あるご決定を賜りますよう、最後にあえてお願い申しあげる次第でございます。

ハイデルベルク 1896年4月7日

国家学教授 カール・クニース

自分の今後の「業務遂行可能性の見通し」について述べていることから、この書簡は退職願ではなく休職願だったと思われるが、結局彼はこれを機に退職することになる。彼は前学期における急病に言及しているが、彼の退任を伝えるハイデルベルク大学「学事年報」の記事は「長年の疾患の結果」としているから（CdU 1896: 27）、かなり以前から健康を害していたようだ。

員外教授エマヌエル・レーザー（1849-1914）による職務代行は、4月10日付でバーデン政府に裁可される（UAH/PA 1853）。クニースはまた、政府宛5月5日付書簡において、レーザーと私講師カール・キンダーマン（1860-1938）による代講案の詳細をしめす（GLA 76/9966）。政府は、6月6日付で、レーザーの増担分（代講分）の手当として報酬700マルクを認可する（UAH/PA 1853）。こうして、当面する1896年夏学期講義の問題は処理された。次の問題はクニースの後任教授を誰にするのかである。

II-4 クニースの対政府工作

クニースの職務代行と後任人事とにかんして、当初から哲学部執行部は彼の知らないところで話をすすめていたらしく、彼は、5月5日付バーデン政府宛書簡において、ブラウネ、シュール、ノイマン、ドマシェフスキを名指しで非難し、不信感を露わにする (GLA 76/9966)。そして後任候補の選考は、彼にとって思いがけない方向に向かっていく。彼の言い分を聞こう。

資料② カール・クニースのバーデン政府宛書簡 (1896 年 8 月 11 日付) (GLA 235/3140)

大公国法務・文部省御中

私の退職願にさいし、後任の件で大公国貴省にあえて提案をさせていただきます。

この提案について、私はただちに当該哲学部に知らせるつもりであります。かかる手順の急変を余儀なくされましたのは、以下のごときひどい体験によるものであります。ひとりの学部長代理が、4人の同僚とともに、休暇中に、私の職務の割当についての学部決定を確定させ、報告しました。そのさい、専門家である私が、諸文書にしめされているこうしたやりかたの割当を「客観的に見間違いだ」と指摘し、それを立証したことを一言も言わずにおいたのです。また、時間が切迫しているのも、あの回りくどい手続きを断念せざるをえませんでした。しかし私はとりわけ次のことを強調しました。私は唯一の専門家であり、学部の他の識者たちはただこの領域における運動の個々の問題と趨勢とおおまかに知っているにすぎず、なんらかの認識を、外から受けとり、また学問とはなんの関係もないさまざまな観点から調達しているにすぎないのです、等々と。私が感じている重大な責任を、かかる有象無象の肩に押しつけることはできません。もちろん、ある意味では、自分自身があらゆる点で意見を同じくする後任以外に、自分の代わりを務めるはずの人を提案することができないことを、私自身が強調しなくてはなりません。よって、私は後任として提案させていただきます。

テュービンゲン大学正教授グスタフ・フォン・シェーンベルクを。

私のこの提案の根拠として、いくつか挙げるだけで十分であります。といいますのは、たしかに、シェーンベルクはかつてバーデン政府によってフライブルクに招聘されたことがあり、なるほどそのあとそこからテュービンゲンへと招聘されているからであります⁽³⁾。なぜなら、同人は、当時のフライブルクよりも、はるかに大きな活動領域をみいだしたからです。同人は、ヴェルテンベルクにおいて一代貴族の保持者であり、もしもブレンターノが特別な斡旋をされなかったとすれば、ミュンヘンに招聘されていたはずであります。シェーンベルクは 1839 年シュテッティン生まれ、私よりも 18 歳年下で、すでに、著名な大冊の『政治経済学要綱』(1882)⁽⁴⁾を他の多くの人とともに共同編集しており、コンラート、エル

スター、レーニング、レクシスによる小事典⁽⁵⁾のなかに列挙されている一連の著作によって知られている国民経済学者であります。しかも、いまでは第四版⁽⁶⁾が出ているこの『要綱』によってとりわけ高い評価を確保しております。同人は十全の精勤において確固たる教育能力をしめしているのみならず、学問の全領域を代表し、それに精通した国民経済学者であり、社会政策においては、一面的な「個人主義的」学派⁽⁷⁾あるいは国家社会主義的潮流⁽⁸⁾といった極端な方向性を信奉する者ではなく、中庸を得た見地をとっております。

私が、私と同様の信念をもつ男を私の後任として推薦しているのは、大多数のドイツの国民経済学者たちからかけはなれた立場からではなく、それでもなお、シェーンベルクの招聘に反対するなどという私には意外に思われる事態にたいして、さらなる提案をなすことを言明し、助言するものであります。

ハイデルベルク 1896 年 8 月 11 日

教授・博士カール・クニース

激情に駆られ、かなり急いで書いたらしく、文章は乱れ、文意を把握しづらい箇所もある。彼は、この提案を哲学部に知らせるつもりだと書いており、それはこの書簡を書いた二日後に実行されている（後出資料③推薦書の末尾を参照）。

彼は、学部の他の構成員を、経済学領域について部分的にしか知らない半可通だと決めつけ、それにたいして、唯一の専門家である自分の推す候補こそ信用できると主張している。一見すると身勝手に乱暴な議論で、通用しそうにないようにみえるが、人事権の所在と人事慣行とを勘案すると、彼には勝算があることがわかる。当時の大学教官は、職務の内外を問わず官吏としての義務と職分とを問われ、自重・自制と国王・国家への忠誠とが求められていた。政府が教授を任命するさいにそれは重要な考查要素であり、しかも教授の任命権は政府にあった。たしかに、教授会の推薦にもとづき、評議会の意見に従って任命するのが通例だったが、政府は、法的にも事実上もこの推薦に拘束されなかった（阿部照哉 1963: 29-32）。推薦名簿の順位に拘束されないばかりか、名簿そのものにも拘束されないのであり、名簿に記載されていない人物を任命する専決人事もすくなくなかった（潮木守一 1992: 265-266）。ハイデルベルク大学哲学部の人事にあつては、比較的に学部の判断が尊重されてきた伝統があつたとされるが（別府昭郎 1987: 232）、それでもそれを覆す余地はもちろんある。

クニースが、哲学部の推薦する候補者は「極端な方向性」を信奉しており、自分の推薦するシェーンベルクこそ「中庸を得た見地」の人物だと言明しているのは、こうした人事考查の要を衝いたものであり、こうした理由づけによって、バーデン政府にたいして、学部推薦を無視してシェーンベルクを任命することをそそのかしているのである。

クニースは、9 月 6 日付国務大臣宛書簡においても同趣旨を繰り返し、政府がまちがった

人選をしないようつよくうながしている (GLA 76/9966)。彼のこうした工作によって、彼と学部との対立は深刻化する。

II-5 教官候補推薦委員会の推薦書 (1896 年)

クニースが執拗に攻撃した哲学部の側の見解は、当該人事にさいして編成された委員会（便宜上「教官候補推薦委員会」と呼んでおく）からバーデン政府に提出された推薦書にまとめられている。これがいわゆる「三名推薦提案 (Dreivorschlag)」に則る推薦書の現物である。こうした文書が日本で紹介されるのは今回が初めてかもしれない。本稿にとってきわめて重要な意味をもつ文書であり、以下にその全文を訳出する。表紙タイトルに引かれている下線はゴシック体で表し、本文中の下線は圏点で表す。〔 〕内は野崎による補足である。

資料③ 教官候補推薦委員会のバーデン政府への推薦書 (1896 年 11 月 2 日付) (GLA 235/3140)

〔表紙〕

委員会報告

〔本文〕

教授カール・クニース氏の退職により処理される国民経済学および国家学の教授職の補充提案の報告に向け、哲学部によって設置された本委員会は、以下の通りの決定をみました。これは、まちがいなくすべて全員一致で決議されたものであります。

ハイデルベルク大学における政治経済学の正教授職は、それを占有してきた人々の声望によって、ドイツの大学においてこの専門領域の特別重要な教授職のひとつになっております。それゆえ、私共にとりまして、このポストに優秀な熟達した学者のひとりが招聘されることが最高度に望ましいのであり、政治経済学が、それと同様に実践的で重要な近代科学の諸分野のひとつに数えいれられているだけに、いっそう望ましいのであります。かかる見地から導かれて、本委員会は、候補者として考慮に入れた人物全員を入念に審査いたしました結果、以下の通りご提案申し上げます。

I ゲオルク・フリードリヒ・クナップ、1842 年生まれ、1867 年ライプツィヒ市統計局主任、1869 年ライプツィヒの員外教授、1874 年シュトラースブルクの正教授。

クナップは、第一に、その厳密な調査に依拠した多数の統計学的研究論文によって、現代の第一級の統計学者のひとりとしての名声を獲得した者であります。死亡率の算出⁽⁹⁾と、ザクセンの死亡率⁽¹⁰⁾と、人口移動の理論⁽¹¹⁾とにかんする同人の諸論稿は、最近の統計学の最良の業績に数えいれられております。しかるに同人の著作は、経済史および社会政策の諸

領域においてもまたこれに劣らず重要であり、こうした諸領域に、同人はとりわけシュトラースブルク招聘以来取りくんでおります。初期プロイセンにおける農民解放と農業労働者の起源とを論じた書物⁽¹²⁾、ならびに奴隷状態および自由状態における農業労働者にかんする講演⁽¹³⁾は、傑出した業績として一般に認められるところであり、他の研究者が同様の調査研究をおこなおうとする誘い水となっております。教師として、同人は、みごとに彫琢されたすぐれた講義によって知られており、しかるになお、シュトラースブルクの国家学ゼミナールの指導者としての活動によってもさらによく知られております。そのゼミナールからは多数の門下生が輩出しており、彼らのなかからは、すでに国民経済学文献のなかで、また大学の教授ポストのなかで重要な地位を獲得する者が多数出ております。クナップの招聘は、本学にとりましてひとつの名誉となるのみならず、本学にとりまして卓越した牽引力を確保することにもなるであります。

Ⅱ カール・ビューヒャー、1847年生まれ、1872-78年ドルトムントおよびフランクフルト・アム・マインの中等学校教師、1881年ミュンヘンの私講師、1882年ドルパートの、1883年バーゼルの、1890年カールスルーエの、1892年以来ライプツィヒの正教授。ビューヒャーもまた、第一に統計学分野におけるその卓越した業績によって、またなによりも十四-十五世紀フランクフルトの人口にかんする模範的な調査研究⁽¹⁴⁾によって、さらにはバーゼル市の人口にかんする模範的な調査研究⁽¹⁵⁾によって、卓越した研究者のひとりとしての名声を獲得した者であります。しかるに、国民経済学にかんするその多数の諸論稿も同様に傑出しており、そこにおいては、近代国民経済の形成にかんする才気あふれる著作⁽¹⁶⁾がとくによく認められ、広範に影響を及ぼしております。教師およびゼミナール指導者として、同人はまったく卓越した成果をしめしております。といいますのは、同人によって創設されたライプツィヒの国民経済学・統計学ゼミナールは、同人によってきわめてすみやかに花開かせられたからであります。それゆえ、同人においてもまた、本学は第一級の力を得ることでありましょう。最後に、ビューヒャーがそのカールスルーエ時代以来わが国〔バーデン大公国〕の学術活動と活発な結びつきをいまも保っていることもまた述べられていいでしょう。こうした活動において、同人は、バーデン歴史委員会のメンバーとして熱心に活動しております。

Ⅲ マックス・ヴェーバー、1864年生まれ、1892年ベルリンの私講師、ひきつづき同地で員外教授、1894年以来フライブルク・イム・ブライスガウの正教授。

政治経済学の若手教師のなかであって、ヴェーバーは特別な位置を占めております。同人は法学にかんする包括的な知識を備えており、商法の諸分野とローマ法史・ゲルマン法史とにおいて抜きん出ているのみならず、熟達した方法によって、法制史と経済史とを高度な統一物として取りあつかうことを知っており、そのさい同人の『ローマ農業史』⁽¹⁷⁾および『中世における商社会社の歴史に寄せて』⁽¹⁸⁾はとりわけ際立ったものであります。ドイツ・東エ

ルベの農業労働者の状態にかんする社会政策学会のアンケートについての同人の著作⁽¹⁹⁾は、現代の経済的諸問題に係わっており、さらにこの系列に、「穀物定期取引について」の論文 (『ドイツ法学者新聞』第 1 巻)⁽²⁰⁾、「取引所について」の論文 (ゲッティンゲン労働者文庫第 2・3 冊)⁽²¹⁾、同人のフライブルク大学就任講演「国民国家と国民経済政策」⁽²²⁾およびその他の有益な小論文が連なっております。ベルリンにおいて、同人は、法学教師として高く評価され、またフライブルクでも大きな指導力を発揮しております。たとえ同人が、その若さゆえに、最初に挙げた二つ〔商法の諸分野とローマ法史・ゲルマン法史〕に、内的完成・解明という点でまだ到達していないとしても、やはりその分野の指導的な人々のうちのひとりになることはすでに今日おおいに期待できます。

予期に反してクナツプの獲得もビューヒャーの獲得もなさそうな場合、他のどの国民経済学者——老大家であれ若手であれ——よりもヴェーバーの招聘が得策であります。また、ヴェーバーのハイデルベルクへの招聘は、場合によっては、この有能な学者を——疑いもなく他の諸大学もまた彼を欲しがっているでありましょうから——つねにバーデンのために確保しておく見込みを保障することにもなろうかと存じます。

枢密顧問官クニース氏は、8 月 13 日付で学部と同氏の退職願を通知されたさい、同氏が大公国貴省にたいして同氏の後任としてテュービンゲンのフォン・シェーンベルク教授を提案した旨通知なさいました。本委員会はこの提案に同意する立場にありません。

ハイデルベルク 1896 年 11 月 2 日

〔署名〕 エアトマンズデルファー
D・シェーファー
シエル
ゲオルク・マイヤー
イエリネク
学部長ブラウネ

文中の文献指示はラフで、ヴェーバーの著作の場合、引用符のつけかたもおかしいが、こうした細かな事項は注に回す。

3 人の候補者は、クナツプ、ビューヒャー、ヴェーバーの順に配されている。これは年齢順である。本稿で後に取りあげる 1900 年、1903 年、1907 年の推薦書においても、候補者はまず、推薦順位によってではなく年齢順に配されている。

簡潔にまとめられたこの推薦書にあっては、クニースの傍若無人の八つ当たりとは好対照の

冴えた筆運びがみられる。まず、国家学・国民経済学・政治経済学（この三者はここでは同義にあつかわれている）のポストの意義が述べられている。資料②のクニース書簡においては、このポストの意義について述べられることなく、手練^{てだれ}の経済学者であるか否かがもっぱら問題にされていたのにならして、この委員会は、国民経済学を実践的近代科学の一分野と位置づけたうえで、このポストにふさわしい人物を推薦しようとするのである。

評価の重点の置きかたをみると、3人の候補者について、実証・歴史・政策の各方面において、いかに独創的な業績を積みあげているのかを重視している。これは、シェーンベルクを推薦するさい、クニースが手堅さと業績の包括性を強調したことのまさに裏返しである。つまり、この委員会は、いまハイデルベルクに必要なのは教科書的包括性を備えた老成した人物ではなく、多方面において先端的な研究をおこなっている人物であると主張しているのである。この点が、クニースと学部との対立点だったと考えられる。学部側がなぜこうした観点を打ちだしたのかについては後述する（次回Ⅱ-7）。

本稿で後に取りあげる 1900 年の推薦書と比較したときに特徴的なのは、推薦順位がつけられていないことである。しかし 3 人の候補者はけっして横一線にあつかわれてはおらず、前二者（クナップとビューヒャー）とヴェーバーとのあいだに明らかな温度差がみうけられる。それは、クナップやビューヒャーの招聘が困難ならヴェーバーを任命せよという一文に集中的に顕れている。クニースによってこの人事が紛糾させられてしまったため、クナップまたはビューヒャーを任命しようとしても、その人は後難を嫌って辞退する可能性がある。「予期に反してクナップの獲得もビューヒャーの獲得もなさそうな場合（*Würde wider Erwarten weder Knapp noch Bücher zu gewinnen sein*）」という副文は、こうした事態をさしているのであろう。また、この副文から、教官候補推薦委員会と政府と各候補者とのあいだで、その招聘可能性について、推薦書が作成される前にすでになんらかの事前協議や打診があったと推断できる。

こうした悲観的見込みを考慮に入れると、クナップやビューヒャーよりも受諾可能性の高い候補者を推薦名簿に入れておく必要がある。というのは、委員会が推薦した 3 人がいずれも辞退してしまうと、政府は、シェーンベルクか、第 5 の候補者——他のまったく推薦されていない人物——を任命することになるからである。委員会としては、そうした事態だけはなんとしても避けなくてはならない。そこで指名したのが第 3 の補欠候補ヴェーバーである。彼は、こうした意味においてこの委員会にとって重要な存在なのである。そこで、年齢差、研究者としてのキャリアの差がある以上、若年者ヴェーバーが不利にあつかわれる危険性を考慮して、彼の研究業績・教育実績を、年齢・キャリアとの相関に配慮した表現で評価している。

この委員会は、人事の流れを読み、政府を牽制し、シェーンベルクや第 5 の候補者を任命する可能性を潰すという老獪な策術を講じている。もちろんそれは、まずクナップまたはビューヒャーの獲得をめざすべきで、両方ともだめだったときにはヴェーバーを招聘すべきだとい

う文脈においてである。委員会がもっとも懸念しているのは、委員会推薦の 3 人でもなくシェンベルクでもない第 5 の候補者を政府が任命することであろう。それは政府がクニースの策謀に引きずられたことを意味し、また哲学部の面目は潰れてしまうからである。「他のどの国民経済学者」よりもヴェーバーが適任だという念押しは、この委員会にとって、ヴェーバーが最後の砦であることをよくしめしている。この推薦書がクニースとの緊迫した関係のなかで出された文書であることを考えると、順位をつけず、とにかく学部推薦者のなかから政府が選んだというかたちを確実なものにすることにもっぱらこの委員会の努力が傾注され、結果としてヴェーバー一本狙いの推薦になったことがわかる。

次に、この委員会の構成についてみてみよう。資料②の書簡においてクニースが罵倒した半可通とは、直接には、この推薦書の末尾に署名している 6 人のことである。各人について、ハイデルベルク大学における役職およびヴェーバーとの関係を中心に紹介する (Drüll 1986: 29, 62-63, 126-127, 179, 232-233, 242)。

歴史学者ベルンハルト・エアトマンスデルファー (1833-1901) は、ベルリンへと去ったハインリヒ・フォン・トライチュケ (1834-96) の後任として 1874 年に招聘された。1884-85 年に学長⁽²³⁾を、1878-79 年と 1891-92 年に哲学部長および大学特別評議会評議員を務めている。

かつてヴェーバーはエアトマンスデルファーのゼミ生であった。既述のように、1882 年夏学期に、ヴェーバーはクニースの講義には失望したが、その一方で、エアトマンスデルファーのもとで精力的に研鑽を積んでいるのである。エアトマンスデルファーの名は、ヴェーバーの 1882 年 5 月 9 日付から 1883 年 3 月 7 日付までの書簡中にかなりの頻度で登場する。ヴェーバーは彼から史料の扱いかたを教わり、また彼から招待を受ける (1882 年 5 月 16 日付)。秋学期には彼の講義二つとゼミに登録する (11 月 4 日付)。結局彼のゼミに残ったのは 3 人だけで、金曜日の夕方には彼の部屋で書物に囲まれて快適に過ごす (11 月 13 日付)。そのゼミのテーマがルネサンス期にさしかかるとますます興味が高まる。彼の二つの講義からも非常に多くのことを学ぶ (1883 年 2 月 12 日付)。彼のゼミではたいへん多くのことを学ぶことができたと満足する (2 月 23 日付)。講義が終了する頃、他の学生たちとともに彼の家を訪れ、くつろいで過ごす (3 月 7 日付)。エアトマンスデルファーのほうも、彼の前任者トライチュケとヴェーバーの伯父ヘルマン・バウムガルテン (1825-93) との論争に関心をもち、バウムガルテンに批判的なながらも、その優秀な甥との交流を深め、次学期にもヴェーバーたちがゼミに参加することを希望している (1883 年 2 月 12 日付, 2 月 23 日付, 3 月 7 日付) (Weber, Max 1936: 46-47, 59, 62-63, 68-70, 71, 73)。

彼はこの推薦書の筆頭署名者であるが、署名の順序は、①当該学部である哲学部の教授 (3 人) の年齢順、②法学部の教授 (2 人) の年齢順、③この委員会にかんする直接の管轄者である哲学部長の順であるから、彼がこの委員会でのどのような位置にあったのかを、署名の順序か

ら推断することはできない。つまり、彼が委員長に類する地位にあったかどうかは判断できないのである。しかし、6人のなかで最年長であり、ハイデルベルク大学における勤続年数も最長である彼の意向は、やはりそれ相応の重みをもったことであろう。

歴史学者ディートリヒ・シェーファー（1845–1929）は、この年の10月にテュービンゲン大学から移ってきたばかりである。彼は、のち（1902年）に、退職願を提出したヴェーバーの慰留に努めている（Weber, Marianne 1926/50: 293–294）。しかしヴェーバーとの関係は疎遠であり、とくにジンメル招聘運動には公然と敵対している（Honigsheim 1963: 211）。1903年にベルリン大学に招聘され、多数の著作によって、また論客として知られるようになる。

古典文献学者フリッツ・シェル（1850–1919）は1877年に招聘された。1890年に学長を、1882–83年と1893–94年に哲学部長および大学特別評議会評議員を務めており、当該期には学部長代理のひとりである。

国法史学者ゲオルク・マイヤー（1841–1900）は、ヘルマン・シュルツェ（1824–88）の後任として1888年に招聘され、翌年に着任した。この人事の翌年、つまりヴェーバーが着任した年に学長を務めている。

ホーニヒスハイムによると、マイヤーについて——おそらくはとりわけその人物について——ヴェーバー周辺の人々は好感をもっていた。またマイヤーとイエリネクとの厚い友情はよく知られており、昼食前に二人が連れだって大学から古城までの山道を散策する光景は、長年にわたるハイデルベルクの名物であった（ebd.: 229）。イエリネクがマイヤーに献じた追悼文は、その温厚篤実な人柄や誠実性を称賛している（Jellinek 1911: 278–281）。

その公法学者ゲオルク・イエリネク（1851–1911）は、アウグスト・フォン・ブルメリンク（1822–90）の後任として1890年に招聘された。したがってブルンチュリの後々任になる。ちょうどこの1896–97年に法学部長および大学特別評議会評議員を務めている。

イエリネクの研究は本来的にヴェーバーの研究と共鳴しあっていた（Honigsheim, a.a.O.: 227）。二人の関係については多くの研究があるが、ここでそれらに触れる紙幅はない。

ヴェーバーは、既述のイエリネク回想において、イエリネクとのあいだに「さらに困難な事情」が生じるにちがいないと思ったと語っている。これは、ここでみているような経過から、着任後、ともに国家学・官房学部門を運営することになるパートナーにたいして、いくらかなりとも屈從的な立場に置かれるのではないかとヴェーバーが危惧したことをしめしている。しかしそうはならず、イエリネクが対等な立場から誠実な友情をしめしたことを、ヴェーバーは心から感謝している。また、その感謝の念の強さを、われわれも追体験し、納得することができる。イエリネクが卒中発作で倒れたとき、家族以外で最初に駆けつけたのはヴェーバーであった（ebd.: 228）。

ゲルマン文献学者ヴィルヘルム・ブラウネ（1850–1926）は、1888年にカール・バルチュ

の後任として招聘された。この1896-97年当時の哲学部長および大学特別評議会評議員である。

このメンバーをみてわかるのは、この人事がたんなる退職者の補充人事という以上の性格をもたせられているということである。シェーファーとマイヤーを除く4人は、この時期までに学部長や評議員や学長を経験しており、学内事情や哲学部の置かれている状況に通じていた。こうした人々によって、学部再編の一環としてこの人事が位置づけられていたと思われる。この点については後述する(次回Ⅱ-7)。

また、哲学部以外のスタッフを二人も入れていることも特徴的である。国家学・官房学部門はもともと法学部との関連が深く、イエリネクは、国家学ゼミナールを哲学部において開講している——つまり法学部と哲学部とを兼担している——(稿末表Ⅱ-1, Ⅱ-2参照)。そのイエリネクとともに、マイヤーも加わっているのである。

6人のうち、シェルとブラウネは役職者として加わっていると考えられ、その専攻領域からいうといくらか畑違いである。またシェーファーは着任後日が浅い。したがって、この3人の意向がこの人選につよく反映されたとは考えにくい。ただ、シェルは、後述するように(次回Ⅱ-7)、自然科学・数学部が開設されたときの学長であり、この開設を推進する役割を果たしていた。彼はこれに引きつづく哲学部の再編にかんしても積極的に関与したと思われるので、彼の役割を小さく見積もることは慎重でありたい。

これにたいして、この時期までのヴェーバーの業績は勝れて史論的な性格をもっていたこと、ヴェーバーがエアトマンズデルファーのゼミ生であったこと、着任後のヴェーバーとイエリネクとの関係および既述のヴェーバーのイエリネク回想、学部再編の方向——これらを勘案すると、委員会の意向を主として左右したのは、国家学ゼミナール担当者のイエリネクと最年長者のエアトマンズデルファーであり、イエリネクと親密な関係を保っているマイヤーがこれに同調し、シェルとブラウネは、国民経済学の領域的拡充による学部再編の観点からこれに賛同し、シェーファーもこれに追随して、ヴェーバーを推薦名簿に入れることで一致をみたのではないかと推察される。

なお、前掲のクニースの書簡とこの推薦書とを勘案してみると、国家学・官房学部門を共同で担ってきたイエリネクとクニースとのあいだには相当な確執があったものと思われる。

結果として、感情的対立を抱えた人事において火中の栗を拾わされたのがヴェーバーである。バーデン政府が好待遇・好条件を提示したにせよ、またイエリネクやエアトマンズデルファーからの強い慫慂があったにせよ、それを受けるヴェーバーはかなりの強心臓である。

もう引退してしまうひとりの教授の意向を採るか現職教授団の意向を採るかという二者択一を迫られると、政府としては後者を採る以外に選択の余地がない。シェーンベルクは論外としても、委員会推薦の3人以外の者を任命した場合には、政府は哲学部の面目を潰すことになり、今後政府と大学との関係に悪影響を及ぼす可能性がある。教官候補推薦委員会をはじめと

する哲学部側がクニースに反発して態度を硬化させている以上、これはもはや通常の人事ではないのであって、政府は、たしかに一般の人事では専決的人事権の行使もありうるけれども、この人事にかぎっては、学部推薦者以外の選択肢をみずから放棄したものと筆者は考える。

ヴェーバー招聘にさいしてもっとも決定的な役割を果たしたのは誰かといえば、それは疑いもなくカール・クニースその人である。彼が妨害工作をしなかったら、この人事は通常の順位つき推薦になっていたと思われる。そのときヴェーバーが第1位に推されることはなかったであろうが、かりに第1位になっていたとしても、バーデン政府がヴェーバーを任命する可能性は低かった。というのは、4年後の1900年の人事では順位つき推薦になっており、しかも政府は、思想性等を理由として第1位の候補を忌避しているからである。この1896年の人事にかぎって、3人の候補（シェーンベルクを入れると4人の候補）のなかで——政府側からみて——社会政策上もっとも急進的な見解をしめし、反ユンカー的立場を鮮明にしているヴェーバーを政府が選ばざるをえなかった理由は、クニースと学部との埋められない溝の狭間で、政府が学部の意向を尊重する以外の途を失っていたことしか考えられないのである。

ヴェーバーのハイデルベルク大学への招聘は、以上のように、まったくの奇貨、僥倖、偶然であった。彼自身が「いくらか複雑な諸事情」と表現した事態は、こうした劇的かつアイロニカルかつパラドキシカルな事態であった。老クニースは、「中庸を得た見地」の人物を採用するように政府に迫ることによって、かえって、その見地からもっとも遠いヴェーバーに漁夫の利を得させてしまった。クニースはこのように、ヴェーバー招聘という彼にとって最悪の結果をみずから招いたのである。（第Ⅱ章未完）

〔注〕

- (1) ヴェーバーのフライブルク大学への招聘をめぐるのは、ヴェーバー自身の態度表明と、ヴェーバーをベルリンに引きとめようと画策したフリードリヒ・アルトホフの対応とが知られており、それは上山安敏によってくわしく研究されている（上山安敏 1978: 第2章）。また関係文書も邦訳されている（上山安敏他編訳 1979: 第4章）。しかし、この人事のもう一方の当事者であるフライブルク大学およびバーデン政府側の意向・動向については研究されていない。そのためこの人事の全容が解明されているとはいいがたい。
- (2) このスピーチは周知のヴェーバー伝に掲載されているが、そこには意味の通りにくい箇所がある（Weber, Marianne 1926/50: 519）。ここでは、ヨハネス・ヴィンケルマンによる再校訂版を用いた（Weber, Max 1911/63: 14）。
- (3) シェーンベルク（1839–1908）は1870年から1873年までフライブルク大学教授であった。1873年にテュービンゲン大学に移り、結局亡くなるまでその職にあった。
- (4) G. Schönberg (Hrsg.), *Handbuch der politischen Oekonomie*. Tübingen: Laupp, 1882. この書簡が書かれた時点ですでに第三版（1890–91）が完結している。
- (5) J. Conrad, L. Elster, W. Lexis und E. Loening (Hrsg.), *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*. Jena: G. Fischer, 1890–1897. クニースは共同編集者のひとり Loening の名を Lonin と誤記している。この事典は、この書簡の年までにすでに第6巻まで刊行し終えているが、補巻を含めて完結するのは翌1897年である。

- (6) 『政治経済学要綱』の第四版は、クニースがこの書簡を書いている 1896 年から 1898 年にかけて刊行されている。周知のように、後年、この『要綱』の刷新を意図してパウル・ジーベックがヴェーバーらに編集を依頼したのが『社会経済学綱要』である。
- (7) ドイツ・マンチェスター派を指す。
- (8) いわゆる「講壇社会主義」派を指す。
- (9) G. F. Knapp, *Über die Ermittlung der Sterblichkeit aus den Aufzeichnungen der Bevölkerungs-Statistik*. Leipzig: J. C. Hinrichs, 1868.
- (10) G. F. Knapp, *Die Sterblichkeit in Sachsen; nach amtlichen Quellen dargestellt*. Leipzig: Duncker & Humblot, 1869.
- (11) G. F. Knapp, *Theorie des Bevölkerungs-Wechsels; Abhandlungen zur angewandten Mathematik*. Braunschweig: F. Vieweg, 1874.
- (12) G. F. Knapp, *Die Bauern-Befreiung und der Ursprung der Landarbeiter in den älteren Theilen Preußens*. Leipzig: Duncker & Humblot, 1887.
- (13) G. F. Knapp, *Die Landarbeiter in Knechtschaft und Freiheit; vier Vorträge*. Leipzig: Duncker & Humblot, 1891.
- (14) K. Bücher, *Die Bevölkerung von Frankfurt am Main im XIV. und XV. Jahrhundert; social-statistische Studien*. Tübingen: H. Laupp, 1886.
- (15) K. Bücher, *Basels Staatseinnahmen und Steuervertheilung 1878-1887*. Basel: J. G. Baur, 1888.
- (16) K. Bücher, *Die Entstehung der Volkswirtschaft; sechs Vorträge*. Tübingen: H. Laupp, 1893.
権田保之助訳 1942『増補改訂 国民経済の成立』(1922 年第十六版の訳) 栗田書店。
- (17) M. Weber, *Die römische Agrargeschichte in ihrer Bedeutung für das Staats- und Privatrecht*. Stuttgart: F. Enke, 1891 (MWGI/2).
- (18) M. Weber, *Zur Geschichte der Handelsgesellschaften im Mittelalter; nach südeuropäischen Quellen*. Stuttgart: F. Enke, 1889. 推薦書中では „Beiträge zur Geschichte . . .“ と記されているが、原題に „Beiträge“ はついていない。
- (19) M. Weber, *Die Verhältnisse der Landarbeiter im ostelbischen Deutschland (Preußische Provinzen, Ost- und Westpreußen, Pommern, Posen, Schlesien, Brandenburg, Großherzogtümer Mecklenburg, Kreis Herzogtum Lauenburg)*. Schriften des Vereins für Socialpolitik, Bd. 55 (Die Verhältnisse der Landarbeiter in Deutschland, Bd. 3). Leipzig: Duncker & Humblot, 1892 (MWGI/3). 肥前栄一訳 2003『東エルベ・ドイツにおける農業労働者の状態』未来社。
- (20) M. Weber, Die technische Funktion des Terminhandels. *Deutsche Juristen-Zeitung*, 1. Jg., Nr. 11, 1. Juni und Nr. 13, 1. Juli 1896 (MWGI/5). 中村貞二・柴田固弘訳 1968「定期取引の技術的機能」『取引所』未来社。推薦書中では「穀物定期取引 (Getreideterminhandel)」と記されているが、原題に „Getreide“ はついていない。
- (21) M. Weber, *Die Börse* (Göttinger Arbeiterbibliothek, 1. Bd., 2. und 3. Heft). Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1894 (MWGI/5). 中村貞二・柴田固弘訳 1968『取引所』未来社。
- (22) M. Weber, *Der Nationalstaat und die Volkswirtschaftspolitik; akademische Antrittsrede*. Freiburg i. B.: J. C. B. Mohr, 1895 (MWGI/4). 田中真晴訳 2000『国民国家と経済政策』未来社。
- (23) 「学長 (Prorektor)」は、語義からすると「学長代理」だが、**Rektor** はバーデン大公の称号のひとつであり、大公がハイデルベルク大学の名目上の学長であるため、学内で選出される **Prorektor** が実質上の学長である。したがって、**Rektor** を「名誉学長」、**Prorektor** を「学長」とするのが適切である。

〔文献〕

- AdV: *Anzeige der Vorlesungen, welche auf der Grossherzoglich Badischen Ruprecht-Karls Universität zu Heidelberg gehalten werden sollen*. Heidelberg: K. Groos/ J. Hörning
- CdU 1896: *Chronik der Universität. Akademische Rede zur Feier des Geburtsfestes des höchstseligen Grossherzogs Karl Friedrich am 21. November 1896 bei dem Vortrage des Jahresberichtes und der Verkündigung der akademischen Preise*. Heidelberg: J. Hörning
- Drüll, D. 1986: *Heidelberger Gelehrtenlexikon 1803–1932*. Berlin: Springer
- GLA 76/9966: Großherzogtum Baden. Ministerium der Justiz, des Kultus und Unterrichts. Generalia. Universität Heidelberg. Diener Professor Dr. Carl Knies von Marburg. Generallandesarchiv Karlsruhe
- GLA 235/3140: Ministerium des Kultus und Unterrichts. Universität Heidelberg. Dienst. Die Lehrkanzeln der Staatswirtschaft, Finanz- und Polizeiwissenschaft, und die Besetzung der Bestellung. Nationalökonomie. 1821–1930. Teil 1. Generallandesarchiv Karlsruhe
- Honigsheim, P. 1963: *Erinnerungen an Max Weber*. R. König (Hrsg.), *Max Weber zum Gedächtnis; Materialien und Dokumente zur Bewertung von Werk und Persönlichkeit*. Köln & Opladen: Westdeutscher Verlag. 大林信治訳 1972『マックス・ウェーバーの思い出』みすず書房
- Jellinek, G. 1911: *Ausgewählte Schriften und Reden*, Bd. 1. Berlin: O. Häring
- MWGI/2: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. I, Bd. 2, Die römische Agrargeschichte in ihrer Bedeutung für das Staats- und Privatrecht. 1891*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1986
- MWGI/3: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. I, Bd. 3, Die Lage der Landarbeiter im ostelbischen Deutschland. 1892*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1984
- MWGI/4: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. I, Bd. 4, Landarbeiterfrage, Nationalstaat und Volkswirtschaftspolitik; Schriften und Reden 1892–1899*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1993
- MWGI/5: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. I, Bd. 5, Börsenwesen. Schriften und Reden 1893–1898*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1999–2000
- MWGI/17: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. I, Bd. 17, Wissenschaft als Beruf 1917/1919 – Politik als Beruf 1919*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1992. 尾高邦雄訳 1980『職業としての学問』岩波書店
- UAH/PA 1853: Universität Heidelberg. Diener und Dienste. Acta personalia. Dr. Karl Knies. Universitätsarchiv Heidelberg
- Weber, Marianne 1926/50: *Max Weber; ein Lebensbild*. Heidelberg: Schneider. 大久保和郎訳 1963『マックス・ウェーバー』みすず書房
- Weber, Max 1911/63: *Gedenkrede Max Webers auf Georg Jellinek*. R. König (Hrsg.), *Max Weber zum Gedächtnis; Materialien und Dokumente zur Bewertung von Werk und Persönlichkeit*. Köln & Opladen: Westdeutscher Verlag
- Weber, Max 1936: *Jugendbriefe*, hrsg. von Marianne Weber. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck). 阿閉吉男・佐藤自郎訳 1995『マックス・ウェーバー 青年時代の手紙 新訳』文化書房 博文社
- 阿部照哉 1963「ドイツにおける学問の自由」京都法学会『法学論叢』72–5
- 上山安敏 1978『ウェーバーとその社会——知識社会と権力——』ミネルヴァ書房
- 上山安敏・三吉敏博・西村稔編訳 1979『ウェーバーの大学論』木鐸社
- 潮木守一 1992『ドイツの大学——文化史的考察——』講談社

別府昭郎 1987「ドイツ大学の歴史的な性格——「公」と「私」のアスペクトから——」広島大学大学教育研究センター『大学論集』17

表Ⅱ-1 国家学・官房学部門の開講科目① (1896-97年)

一八九六年夏学期	講義	一般国家学および一般政治学 (法学部科目)	
		一般国法学およびドイツ国法学 (法学部科目)	
		国際法 (法学部科目)	
		行政法 (警察学を含む) (法学部科目)	
		社会の科学 (社会学) (シェラー)	
		国民経済学の基本問題 (その課題と方法, 統計学を含む) (キンダーマン)	
		一般国民経済学説 (理論的国民経済学) (クニース)	
		実践的国民経済学 (レーザー)	
		財政学 (レーザー)	
		取引所および取引所事業について (レーザー)	
		工業活動における労働問題 (キンダーマン)	
		農業総論第二部 農場経営論 (シュテンゲル) (自然科学・数学部科目)	
		牛乳と酪農について (シュテンゲル) (自然科学・数学部科目)	
	演習	国家学ゼミナール	政治経済学演習 (クニース)
			公法学演習 (イエリネク) (法学ゼミナールと合同)
一八九六/九七年冬学期	講義	一般国法学およびドイツ国法学 (法学部科目)	
		国際法 (法学部科目)	
		行政法 (法学部科目)	
		社会の科学 (社会学) (シェラー)	
		国民経済学 (レーザー)	
		実践的国民経済学 (キンダーマン)	
		財政学 (クニース)	
		国民経済学史および社会主義史 (クニース)	
		政治的算術 (自然科学・数学部科目)	
		化学技術 (自然科学・数学部科目)	
		農学第一部 生産学 (自然科学・数学部科目)	
		家畜飼育および給餌について (自然科学・数学部科目)	
		取引所および取引所事業について (レーザー)	
		官房学の補習および演習 (レーザー)	
	演習	国家学ゼミナール	政治経済学演習 (クニース)
			公法学演習 (イエリネク) (法学ゼミナールと合同)

注: クニース担当予定科目は, 実際には代講か開講になった。演習は, 国家学ゼミナールという大区分が与えられ, そのもとに各担当者の科目が記されている。レーザーの「官房学の補習および演習」は演習を含んでいるが, 国家学ゼミナールのカテゴリーに入れられていないので, 講義科目に入れた。

出典: AdV.

表Ⅱ－2 国家学・官房学部門の開講科目②（1897-98年）

一八九七年夏学期	講義	一般国家学および一般政治学（法学部科目）	
		一般国法学およびドイツ国法学（法学部科目）	
		国際法（法学部科目）	
		行政法（警察学を含む）（法学部科目）	
		社会の科学（社会学）（シェラー）	
		農業政策の基本問題（キンダーマン）	
		一般的（「理論的」）国民経済学（ヴェーバー）	
		実践的国民経済学（レーザー）	
		財政学（レーザー）	
		現代の社会主義（レーザー）	
		工業活動における労働問題（キンダーマン）	
		農業総論第二部 農場経営論（シュテンゲル）（自然科学・数学部科目）	
		牛乳と酪農について（シュテンゲル）（自然科学・数学部科目）	
	演習	国民経済学ゼミナール	無題（ヴェーバー）
		国家学ゼミナール	公法学演習（イエリネク）（法学ゼミナールと合同）
一八九七／九八年冬学期	講義	一般のおよびドイツの帝国国法・領邦国法（法学部科目）	
		国際法（法学部科目）	
		行政法（法学部科目）	
		社会の科学（社会学）（シェラー）	
		実践的国民経済学（商業政策・工業政策・交通政策）（ヴェーバー）	
		農業政策（ヴェーバー）	
		国民経済学（レーザー）	
		財政学（キンダーマン）	
		農学第一部 生産学（自然科学・数学部科目）	
		家畜飼育および給餌について（自然科学・数学部科目）	
	演習	国民経済学ゼミナール	演習（ヴェーバー）
			官房学学修者のための補習と演習（レーザー）
		国家学ゼミナール	公法学演習（イエリネク）（法学ゼミナールと合同）
			無題（ヴェーバー）（国民経済学ゼミナールと合同）

注： 演習は、国民経済学ゼミナールと国家学ゼミナールの二つの大区分が与えられ、そのもとに各担当者の科目が記されている。

出典： AdV.

〔付記〕

本稿は、平成 15-16 年度科学研究費（基盤研究(C)(2)）による個人研究の成果の一部である。

史料の解説にあたっては、カールスルーエ一般公文書館のエーファ・カーダーマン氏他のスタッフの方々、およびハイデルベルク大学史料館のエーヴァルト・ケースラー氏にご助力いただいた。御礼申しあげる。

（のぞき としろう 公共政策学科）

2004 年 4 月 23 日受理